

南庭

宸殿の南側の庭は、厳粛さを演出できるように意図的に簡素な造りになっています。宸殿から庭を2つの門に向けて見渡すと、杉や松を背景に、白砂利を敷き詰めた石庭が広がっています。これらの石は京都の白河地域で採集したもので、交換用の石はもう手に入らないため、庭の本来の姿を維持するために定期的に洗う必要があります。宸殿の真正面には、桜（左）と橘（右）の木があります。この組み合わせは10世紀に京都御所の正殿前に桜と橘の木が植えられて以来、縁起が良いものとされ、朝廷に関連付けられています。

仁和寺への重要な来訪者は、御殿に向かう途中で南庭を通ります。御殿に入る際には、天皇とその使者たちは、大きな勅使門から入り、庭を通して直接白書院に向かいますが、他の皇族は、あまり目立たない皇族門を使い、これら2本の木の間を通して入ります。